

氏名（本籍）	クボタ ヒロコ 久保田 寛子（広島県）
学位の種類	博士（芸術）
学位記番号	甲第150号
学位授与年月日	2023年3月23日
学位授与の要件	広島市立大学大学院学則第36条第2項及び広島市立大学学位規程第3条第2項の規定による
学位論文題目	絣織をとりまく言葉と数、その意匠について -箄の単位と絣織技法の表現-
論文審査委員	主査 教授 倉内 啓 委員 教授 吉田 幸弘 委員 准教授 城市 真理子 委員 福田 浩子（広島県立美術館 学芸課長）

論文内容の要旨

「織」の制作は「絣織」のみならず、糸の本数、寸法、密度など「数」を避けては通れない。この研究を始めたいと思ったきっかけは、織道具で織物を打ち込むときに使う箄（おさ）の単位の違いを知る経験からであった。学部時代、沖縄で絣織を学んだが、その当時の箄は「算（ヨミ）」という単位で、なにも疑うことなく使用していた。○ヨミ＝1cmの間に○羽（着尺であれば○×2本/cmの経糸を使う）と、普段われわれが使うメートル法と対応していたのも疑わなかった理由の一つだった。しかし、広島で博士前期課程に進学し大学にあった箄の単位は「曲尺（かねじゃく）」「鯨尺（くじらじゃく）」であり、随分とまどった。

元々着物の仕立ての寸法は尺貫法（しゃっかんほう）で、沖縄の単位と本土の単位が違う、とも思っていた。しかし、広島の中山間地域で絣も産出していた絹織物（厳密に言えば山繭）産地である可部と養蚕（家蚕）の歴史のある三次の吉舎町の民具として拝見した箄はヨミ（ヨメ）であり、また筆者自身も広島の知人から譲り受けた織機の箄の単位は「算（ヨミ）」であった。そして、中山間地域での機と自分が譲り受けた機は大島紬の同型の機であった。

箄が織り機に付随すると考えれば沖縄時代の機とヨミの箄、広島市立大学にある京式の機に付随する鯨尺や曲尺単位の箄は、地域やその技術に付随してきたものと考えればなんら不自然ではない。しかし、同じ広島の別々の場所でなぜ大島紬の同じ機が、そして箄も同じヨミなのか、と疑問をもった。

もう一つの理由は、博士前期課程での、絣の伝播についての研究で由来のわかる作品が見つけないことで頭を悩ませた点である。いつ、何処で誰が作ったのか？という由来の部分が、国家珍宝帳のように由来のわかる正倉院御物などの伝世品でない限り、由来はわからないという染織品ならではの特性がある。確かに染織品は流通されてしまうと産地が判明しづらく、衣服であればいずれは消耗品として襤褸（らんる）になるまで使い尽くされ、あとは廃棄されることが多い。しかし、現在も産地として存在する場所ではその織物を作る機やそのほかの道具、単位などは産地に残る可能性は高い。また、絣など特殊な技術がいるものに道具が付随するこ

となく技術だけ伝播したとは考えにくい。もし、道具が残っていなかったとしても、その呼称が言葉として残る可能性もあると考えた。

これらの動機から絣織を取り巻く言葉と数を手掛かりに、今後の絣制作を含め研究した内容を5つの章で構成した。

一章「箆と単位」では、その箆の単位の疑問を発端に、そもそも箆とは何かという観点から東西の箆のなりたちと度量衡（どりょうこう）について調べ考察した。

二章「絣産地に残る道具と言葉と数」では、文献調査と並行して日本の織物産地や機料店、特に絣産地を中心に2017年から2020年に亘り九州、中四国、京都、関東と近隣その他織物産地も含め約33か所を現地取材した。機や工程の呼称も含めた調査とともに各産地の特徴を分析し、それらを比較して考察した。

三章「絣織から見えてきたこと」では、前章の現地や文献の調査を進めていくうちに絣産地での道具の呼称の違いと伝播の関係、絣織での箆密度と、扱う素材や絣柄の表現の違いとそれぞれの関係性を考察した。さらに、産地と性別、年齢、身分による柄の大小など、数やそれぞれの持つ特性を手掛かりにその傾向を分析し比較することで、絣織の普及したさまざまな背景を読み解けないかを試みた。絣織で表現できる柄について括る工程や比率などの数を基準に分類した。絣織のイメージが定着した商業的な絣織だけではなく、特別な意味のある絣柄もある。それらの絣柄の表現の呼称と意味を考察した。

四章「絣織の形態」では、古くから大切にされて残る絣織が主に包む形態であることから、現地や文献調査を踏まえ、絣織の形態の種類ごとにそれぞれの「包む」行為とその意味から、その形態とともに使われる背景や用途と絣柄の特徴にも目を向け考察した。

五章「絣織制作の表現と展開」では、現代の絣織の在り方を考えるために前章までの絣織の調査や分析を踏まえ、現代の絣の実例と、それを受けての作品制作においての今後の展開に必要なこととは何かを考えた。筆者自身もデジタルや異素材など現代要素を取り入れ、2014年から取り組む独自の絣柄の確立の過程と、他技法を併用した糸の造形の作品制作の実践と今後の展開の計画を述べた。

以上、絣織を構成する道具や技法、工程やその単位の数や言葉の調査からそれぞれの比較と考察を行い、現代の絣作品の制作に何が必要なのは何かを改めて見つめなおした。絣制作をする一人としての視点から、今後の絣の展開を論じる。

論文審査の結果の要旨

論文『絣織をとりまく言葉と数、その意匠について』は、作り手と道具の関係を職人的な視点と作家的な感性の間で疑問を抱いたことが契機となっている。

各地の絣織産地に取材を重ね、それぞれの産地を比較し道具の呼称の違いと伝播の関係、絣織

での箴密度と扱う素材や柄の表現の違いを「言葉」や「数」をキーワードに解き明かし、最終章の「柄制作の表現と展開」まで導いている。

予備審査以降に論文の後半部分を整理修正し、最終の第5章の論題を変え、内容を申請者自身の織物制作における表現の展開と可能性に重きを置くことにより、具体的な作品とその制作事例によってより分かりやすい論述となった。

また、高齢化と就業人口の低下が懸念される織物産地における筆者のフィールドワークは、貴重な現地調査報告書であり、染織史においても言語学、民俗学的な観点で非常に重要な資料となり得る。

作品は『経柄着物「潤ふ」』外、全6点が提出された。内容は、「着物」と「仕覆」であるが、全ての作品が絹糸を使用し、琉球藍を中心とした植物染料で染めたもので、着物(織幅:約40cm)であると1,500~2,000本もの経糸(柄染糸)を使った13m長の織物であり、丁寧に製織された完成度の高い作品群である。それぞれの作品が、身近な川や海、自然をテーマに心象風景として織り出されているが、作者の自然への畏敬の念と、その中で暮らす人間たちへの温かな眼差しが感じられる。

作品数としてはやや少なくも感じるが、一つ一つ手に取って見れば、絹の素材感のなかに繊細な染糸のコンビネーションと柄が見えてきて、その制作に費やされた時間と熱量に圧倒させられる。中でも伝統的手法による織物が、プロダクティブなアプローチによって現代の造形として生まれ変わった「仕覆」の作品制作における作者の飽く無き挑戦と新たな展開は特筆に値する研究成果である。

以上のことから久保田寛子の論文と作品は、博士本審査において合格と判断した。